

「第11回八千代市市民意識調査報告書」について、一部誤りがありましたので、正誤表のとおり、訂正いたします。

10 ページ

7 標本誤差

誤

標本誤差は次式で得られ、①比率算出の基数（n）、②回答の比率（p）によって誤差幅が異なる。

$$\text{標本誤差} = \pm 2 \sqrt{\frac{2}{N-1} \times \frac{N-n}{n} \times \frac{p(1-p)}{n}}$$

N=母集団数(八千代市の18歳以上人口)  
 n=比率算出の基数(回答者数)  
 p=回答の比率(%)

今回の調査結果の標本誤差は下記のようになる。

回答比率(P) n	90%または 10%程度	80%または 20%程度	70%または 30%程度	60%または 40%程度	50%程度
1,072	±2.59%	±3.46%	±3.96%	±4.23%	±4.32%
1,000	±2.68%	±3.58%	±4.10%	±4.38%	±4.47%
800	±3.00%	±4.00%	±4.58%	±4.90%	±5.00%
600	±3.46%	±4.62%	±5.29%	±5.66%	±5.77%
400	±4.24%	±5.66%	±6.48%	±6.93%	±7.07%
200	±6.00%	±8.00%	±9.17%	±9.80%	±10.00%
150	±6.93%	±9.24%	±10.58%	±11.31%	±11.55%
100	±8.49%	±11.31%	±12.96%	±13.86%	±14.14%

※ 上表は  $\frac{N-n}{N-1} = 1$  として算出している。なお、この表の計算式の信頼度は95%である。

注/この表の見方

標本誤差とは・・・今回のように全体（母集団）の中から一部を抽出して行う標本調査においては、全体を対象に行った調査と比べ、調査結果に差が生じることがあり、その誤差のことをいう。この誤差は、標本の抽出方法や標本数によって異なるが、その誤差を数学的に計算することが可能である。その計算式を今回の調査に当てはめて算出したのが、上記の表である。見方としては、例えば、「ある設問の回答数が1,072であり、その設問中の選択肢の回答比率が60%であった場合、その回答比率の誤差の範囲は最高でも±4.23%以内（55.77～64.23%）である」とみることができる。

正

標本誤差は次式で得られ、①比率算出の基数（n）、②回答の比率（p）によって誤差幅が異なる。

$$\text{標本誤差} = \pm 2 \sqrt{\frac{N-n}{N-1} \times \frac{p(1-p)}{n}}$$

N=母集団数(八千代市の18歳以上人口)  
 n=比率算出の基数(回答者数)  
 p=回答の比率(%)

今回の調査結果の標本誤差は下記のようになる。

回答比率(p) n	90%または 10%程度	80%または 20%程度	70%または 30%程度	60%または 40%程度	50%程度
1,072	±1.83%	±2.44%	±2.80%	±2.99%	±3.05%
1,000	±1.90%	±2.53%	±2.90%	±3.10%	±3.16%
800	±2.12%	±2.83%	±3.24%	±3.46%	±3.54%
600	±2.45%	±3.27%	±3.74%	±4.00%	±4.08%
400	±3.00%	±4.00%	±4.58%	±4.90%	±5.00%
200	±4.24%	±5.66%	±6.48%	±6.93%	±7.07%
150	±4.90%	±6.53%	±7.48%	±8.00%	±8.16%
100	±6.00%	±8.00%	±9.17%	±9.80%	±10.00%

※ 上表は  $\frac{N-n}{N-1} = 1$  として算出している。なお、この表の計算式の信頼度は95%である。

注/この表の見方

標本誤差とは・・・今回のように全体（母集団）の中から一部を抽出して行う標本調査においては、全体を対象に行った調査と比べ、調査結果に差が生じることがあり、その誤差のことをいう。この誤差は、標本の抽出方法や標本数によって異なるが、その誤差を数学的に計算することが可能である。その計算式を今回の調査に当てはめて算出したのが、上記の表である。見方としては、例えば、「ある設問の回答数が1,072であり、その設問中の選択肢の回答比率が60%であった場合、その回答比率の誤差の範囲は最高でも±2.99%以内（57.01～62.99%）である」とみることができる。